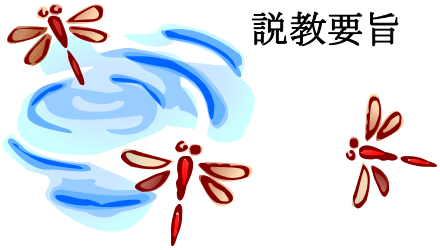

# 説教要旨　「平和を実現する道へ」

マタイによる福音書　５章９～１１節

日本には、戦死した兵士を神として祀る宗教があります。明治維新の戊辰戦争以来、天皇の軍隊の兵士として死んだ者を“英霊”として崇拝の対象とする「国家神道」という宗教です。一般人の戦没者はまったく相手にせず、戦死した兵士だけが崇拝の対象とされています。また戦死した兵士であっても、天皇にたてついて死んだ者は祀られません。そこでは、「現在の平和があるのは、英霊となった方々のおかげだ」との説明がなされます。平和を作り出すために、なぜ人が死ななければならないのでしょうか。なぜ平和を作り出すために、人を殺さなければならないのでしょうか。そうしてたどり着いた未来が、本当に平和だと言えるのでしょうか。

イエス・キリストは、誰かを犠牲にする道ではなく、反対者を力でねじ伏せる道でもなく、「一粒の麦は、地に落ちて死ななければ、一粒のままである。だが、死ねば、多くの実を結ぶ。」（ヨハネ 12:24）そういって、自らが十字架にかかる道を選ばれました。このイエス・キリストの生きざまと、そして死にざまとを見つめたならば、人を殺したり、抑圧することで得られたもの、築かれたことを「よし」とすることはできるはずがありません。

この先、平和を訴えるだけでも迫害を受けるような時代になってしまったとして、その時に迫害を恐れずに「平和を実現する人々は、幸いである、その人たちは神の子と呼ばれる」（マタイ 5:9）とのみ言葉に立ち続けることができるでしょうか。ここ数カ月の新型コロナ感染症の騒ぎのなかで、この日本社会の同調圧力に抗いきれずにいる無力さを思います。平和を実現するものでありたいと願いながらも、無力さを言い訳にして、真正面から平和を追い求めることができないでいる、弱く惨めな者であることを思わずにはいられません。

平和を実現しようとする者が迫害を受けるような時代がこないことを、そして、その場に立たされた時には、イエス・キリストの十字架をしっかりと見つめる者であれるよう、切に願い祈るものです。

（２０２０・８・２　説教者：稲垣真実）